

別室の有効活用で教室復帰を目標にする支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校1年生の夏休み明けから別室を利用しており、友人と過ごす時以外は表情が暗く、支援員の問いかけにも答えられないことがあった。2年生からは少しずつ表情が明るくなり、夏休みの海外交換留学を経て、9月以降は支援員とのコミュニケーションも良好になる。現在は、実技教科や総合的な学習の時間、得意な数学の授業に自ら参加している。

具体的な取組

○多様な学びの場を提供する取組

毎日4校時の「学習タイム」では校内別室支援員や教員と英語・数学を学んでいる。気持ちが学習に向かないことがあっても、支援員や教員の声かけで、学習に毎日取り組むことができる。



○別室対応による不登校生徒の支援

技術科の教員と協力し、花壇用看板やげた箱など校内で必要な物づくりに取り組んでいる。教室に入りづらい時は一緒に教室まで行くなどの支援をしている。また、教科担当が授業プリントを別室に届けたり、支援員が取りに行ったりすることもある。

○居場所の提供

教室に入って授業を受けた後は、「つかれたー。」と別室に戻ってくつろいでいることから、当該生徒にとって別室が安心して過ごせる場所になっている。

また、部活動にも参加しており、部活動の仲間と休み時間に図書室で過ごすことも多く、良い関係を築けている。

○不登校生徒の情報収集と対応

学級担任・SC・心の相談員・支援員と情報共有を行っている。SC・心の相談員も別室に来てカードゲームや話をしたりしている。活動記録を毎日記入し、週末に支援員、学級担任がコメントを書いている。教室復帰に気持ちが向くように支援員が声かけをしている。

成果

当該生徒は、別室利用により安定した登校ができるようになり、支援員や他の利用者と良好な関係を築けている。自ら学習の提案や近況報告もできるようになり、笑顔も増えた。交換留学の事前事後学習にも積極的に参加して頑張る姿が見られた。合唱コンクールでも堂々と自信をもって歌っていた。

課題

学級担任・SCなどと組織的な連携を図ることや、校内別室指導支援員への研修や指導を行っていくことが必要である。

校内別室の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は起立性調節障害や集団への不適應により、小学校 5 年生から不登校であり、中学校入学後も欠席が続いた。S C の面談や部活動のために短時間の登校をすることがあったが、教室には入れなかった。中学校 2 年生の 5 月からは校内別室に登校し始め、9 月以降からは毎日校内別室に登校している。

具体的な取組

○支援員による支援

生徒が活動内容（学習や軽い運動等）を決め、支援員がサポートした。利用生徒同士が自主的に学習を教え合う様子も見られた。

○生徒や支援員との関わりの充実

当該生徒が、校内別室を利用する生徒や支援員とボードゲームやカードゲームに取り組む時間を設け、小グループでコミュニケーションをとれる機会を意図的に設定した。



○振り返りシートの活用

当該生徒が、校内別室に登校した日には、活動した内容を記録し、振り返りを行い、積み重ねを実感させることができた。記入後は、担任が確認し、メッセージを書き、担任とのつながりを感じられるようにした。

○S C との関わりの充実

S C が校内別室の様子を日常的に観察しており、当該生徒との関係づくりができています。また、当該生徒や保護者に対して定期的に面談を行っており、家庭や S C と連携した支援ができた。

成果

当該生徒にとって、校内別室が安心安全に過ごせる場となり、毎日登校することができた。また、学習に対して前向きに取り組むようになり、定期テストの点数も向上し、学習に自信がもてるようになった。

課題

当該生徒の目標の教室復帰に向けて、不安を軽減し、対人関係への自信もてるようにする必要がある。

校内別室指導支援員の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 2 年生である。小学校在籍時から不安症の症状があった。小学校在籍時には起立性調節障害の診断も出ており、中学校入学後は 1 年生 6 月から 3 月まで長期欠席が続いていた。2 年生 4 月から校内別室の利用を開始した。現在は、週 3 日程度の継続的な登校ができるようになっている。

具体的な取組

○自己決定の場としての活用

校内別室を自己決定の場とし、生徒自身が自らの意思でその日取り組む内容を選択、決定できるように、寄り添う支援を行っている。先の見通しをもてるようにする支援により、少しずつ登校後のスケジュールを自身で考えられるようになり、主体的な活動を実践することが可能になりつつある。

○給食時間の取り組み

教室復帰を目指し、学級の生徒に給食の配膳を協力してもらい、短時間であっても生徒同士が交流できる機会を設けている。また、担任、校内別室支援員以外の教職員との関係性の構築を目指し、給食後の食器返却場所を事務職員と共有の場に設定し、会話が生まれやすいように工夫している。

○学校行事への参加

支援員は、運動会や文化発表会へ参加しやすいように、学年練習や学級の練習に同行し、不安なく見学できる環境づくりの構築を支援している。担任や学年教員は、事前に当該生徒の意向を確認し、信頼する友達や話しやすい同級生を同じグループや班に配置するように配慮した。

○学習の保証

リモートでも授業に参加しやすいように、一人 1 台端末を積極的に活用している。また、学習や定期考査にもストレスなく取り組めるように、校内別室内のイスやパーティションの配置を工夫し、当該生徒が落ち着いて学習に取り組める環境を整えている。



成果

校内別室支援員を活用することで、当該生徒は登校後の自身の居場所を見付けることができた。小集団での活動を通して、安心感が生まれ、自分のペースで学習や行事に取り組むことができつつある。このことが継続的な登校につながり、学年の行事にも参加しようとする意欲になっている。また、担任との関係にも慣れ、自身の思いを伝える機会が増えている。

課題

小集団から中集団への移行、学年行事への参加、学習機会の保障（受験に向けた準備）などが課題である。

校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 2 年生の生徒で、小学校 6 年生の 3 月から不登校傾向が始まり、中学校 1 年生の 5 月下旬以降、欠席が続いた。コミュニケーションを取るのが苦手であるが、習い事には参加できている。当該生徒が、まずは、定期的に登校できることを目標に設定した。

具体的な取組

○校内別室の紹介

校内委員会で、当該生徒について相談をし、校内別室への登校について、検討した。その上で、担任との三者面談で、校内別室について紹介したところ、当該生徒が興味を示し、実際に校内別室への登校がスタートした。

○別室支援員との連携

担任と別室支援員が、当該生徒についての状況を確認しながら支援に当たった。アセスメントから、支援員も当該生徒に寄り添う対応ができ、また、別室での支援を担当へ伝えることで、担任からの適切なアプローチもできるようになった。

○オンラインの活用

一人 1 台端末を活用した校内別室と教室をつなぐオンライン授業で、皆と授業と同じ課題に取り組めるようにした。

また、オンラインで、クラスメートとのコミュニケーションが図れるように工夫した。

○SC との面談

校内別室登校時に、SC との面談を設定し、専門家のアドバイスを受けることができるようにした。



成果

校内別室への登校から、本人が不登校になった要因が解明し、登校へのハードルを下げることでできた。また、オンラインで授業が受けられ、個別の支援をしてもらえる環境が、学習への不安を解消させた。ほぼ、毎日、別室への登校ができるようになった。

課題

今後、特定の教科の授業から教室に戻れるようにし、他の生徒とコミュニケーションする活動を増やしていくことが課題である。

校内別室での支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 1 年生から登校しぶりがあり、2 年生で欠席が 30 日以上となった。3 年生になってからは教室に入れなくなり、4 月には 1 か月程度欠席が続いた。当該生徒には書字の困難さが見られ、学習の定着が図れなかったことが欠席の背景にある。5 月から週 2 日程度、校内別室を利用するようになり、タブレット端末を利用して自分のペースで学習を進め、学習に対して前向きに取り組めるようになった。

具体的な取組

○個に応じた支援

書くことの多い課題については無理に取り組ませず、一人 1 台端末の学習ソフトを用いて学習するようにした。また、マス目の大きな方眼の用紙を活動シートとして用意し、文字のバランスを意識して書けるようにした。

○行事への参加の支援

行事の参加の有無について、当該生徒の気持ちを担任が確認した上で、当該生徒がどのように取り組むか支援員と相談した。特に、修学旅行の事前指導に不安があったため、支援員が付き添って参加した。なお、修学旅行中は班行動にも参加することができ、充実して過ごす様子が見られた。

○出席ボードの活用

職員室のホワイトボードに当該生徒の登校時刻や場所を記し、登校状況を可視化することで、担任等が自身の空き時間に来室して関わりをもつことができるようにした。当該生徒が予定する時刻に登校しない時には、支援員や学年の教員が連携して保護者に連絡をとった。

○提出物等の支援

当該生徒は提出物を紛失したり、提出期限を守れなかったりすることがあるため、提出物等のチェックシートを活用し、支援員と担任、保護者が連携して提出物の確認ができるようにした。

成果

当該生徒は、学習に対して前向きに取り組めるようになった。卒業後の進路選択に向けて学校訪問を進んで行い、志望校を決定した後、面接練習に取り組んだ。

課題

別室登校の頻度を週 2 日から週 3 日に増やすことで、基本的な生活習慣を定着する必要がある。

校内別室の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、小学生の時から登校しぶりが始まった。中学校の生活の変化により気持ちが落ち着かなくなり、癇癢を起こし、登校を渋るようになった。中学校 2 年生の 4 月からは、集団への不適応があり、教室ではなく校内別室に毎日登校ができるようになった。

具体的な取組

○生徒の居場所の確保

パーティションを設置し、安心して学習活動等に取り組めるようにした。

また、学習をする時間と支援員や他の生徒との交流する時間の切り替えができるようにした。



○生徒の興味に応じた学習支援

活動内容は当該生徒が自分で考え、教室の授業にオンラインで参加したり、問題集を活用して学習したりした。休憩時間も設定できるように、メリハリを付けて学習できるよう支援した。

○支援員や他の生徒との関係づくり

学習の休憩時間には、支援員との日常会話や生徒の関心が高い将棋等のゲームを通してコミュニケーションを図り、支援員との関係づくりすることができた。また、当該生徒の気持ちを確認した上で、他の生徒ともカードゲームを通して関わることもできた。

○振り返りシートの活用

校内別室に登校した日には、活動した内容を記録し、振り返りを行い、登校の積み重ねを実感させることができた。

生徒が「今月の目標」を記入し、支援員が目標に沿った支援を行った。

成果

小学校では不登校だったが、別室に登校できるようになった。登校の日数が増えたため、担任や学年の教員との関わりが増え、職場体験等の行事にも前向きに参加することができた。

課題

当該生徒が教室復帰を目標としているため、学習支援と集団に対応できるよう、ソーシャルスキルを高める支援を充実する。

別室など様々な場所での支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校の早い時期に別室登校が始まった。中学校 1 年生の時はタブレット端末を活用した調べものをして、午前中給食前に下校することが大半だった。2 年生からは総合的な学習の時間や保健体育など、参加できる授業が増え、給食を食べた後の下校になり、学ぶ時間が増えた。

具体的な取組

○個別学習の充実

生物や科学に興味のある当該生徒が調べた結果について、当該生徒が説明している内容を聴き、共感するようにした。教科のワークや数学の復習に少しずつ取り組むように教科担任と連携して進めていった。

○学級との関わり

当該生徒と相談し、参加する授業を自己決定できるようにした。担任と連携して当番活動への参加を勧めた。職場体験や校外学習に関する学習にもできるだけ参加するように促した。

○学校行事への主体的な参加

当該生徒が、職場体験での校内清掃、図書室展示の飾り付け等を参加生徒のまとめ役として取り組む機会を設定した。支援員は、体育祭で当該生徒の応援に付き添い、校庭で参加できるように支援した。体育館での班での取組への参加を自己決定するように働きかけていった。

○コミュニケーション能力の向上

校内別室で過ごす生徒一人一人が安心して過ごせるように、別室のルールを明確にした。利用する生徒と毎日相談して、一日の活動について一緒に考えた。担任や教科担任が別室をに来て、利用する生徒とつながりができるように働きかけた。



成果

当該生徒は、中学校 1 年生の時は午前中 2 時間だけの登校だったが、2 年生では毎日 4 時間、別室で過ごせるようになった。教科の勉強や復習にも徐々に取り組むようになり、少しずつ学習習慣が身に付いている。

課題

当該生徒は、同級生の生徒との関わりが苦手で班の活動では意見を出せないことがある。学級活動に参加することで自信がもてるようになる必要がある。

別室でのエネルギーチャージのための取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、現在中学校 2 年生であり、1 年生の夏休み明けから遅刻・欠席が続き、週に数日別室に登校するようになった。今年度 5 月から校内別室指導支援員を配置し、校内別室が整備されてからは、ほとんど毎日校内別室に登校している。集会や教室での授業などにはまだ参加できないが、職場体験に参加することができた。

具体的な取組

○ 1 校時～ 3 校時の個別学習の時間

当該生徒が得意な数学と理科の学習を中心に、一人 1 台端末やワークを用いて定期考査に向けた個別学習を支援している。その他の科目についても、授業の進度に合わせて、各科目の教員と連携して別室での学習進捗を管理し、目標をもって学習に取り組めるよう支援している。

○ 4、5 校時の小集団活動の時間

教室復帰のためのエネルギーチャージを目的として、小集団の活動の時間を設けている。校内別室支援員や他の別室利用生徒との卓球やボッチャ、学年の教員との将棋やオセロなどを通して小集団活動の機会を設定している。



○ SC、教職員、家庭との連携

両親と SC の面談も定期的に行い、医療機関への受診も検討している。学級担任・学年主任・各教科の教員・副校長・SC・心の教育相談員など多くの教職員が当該生徒と関わっている。当該生徒の自発的な行動が増え、コミュニケーションが円滑になってきた。

○ 学校行事、授業への参加

運動会は校内別室支援員と一緒に別室から見学した。学年種目だけは校庭に出て見学できた。事前学習の全体指導には別室から支援員とリモートで参加し、職場体験に参加することができた。個別学習の時間に、担任と理科の実験をする時間を設け、学習意欲を高める機会とした。

成果

校内別室支援員との関係がよく、別室への登校が定着し、欠席日数が減少した。5 月から 10 月までの欠席日数は 5 日で、ほぼ毎日登校できている。同学年の生徒と共に職場体験に参加し、事前の職業調べや、事後のお礼状作成に取り組むことができた。

課題

集団に入る機会を少しずつ増やしていく。内発的動機付けを高めるために、小さな成功体験を重ねていく。

校内別室を活用した登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、友人関係の構築に困難さを抱えており、小学校時代から保健室登校を継続していた。中学校入学後も教室に居場所を見いだすことが難しく、校内別室を活用しての登校支援が続いている。両親の関係が良くない時期もあり、精神的に不安定になることもある。

具体的な取組

○校内別室の利用条件の再設定

昨年度の利用状況の課題を踏まえて、校内別室利用時のきまりの再編成を行った。利用生徒の生活状況に合わせて登下校時間の設定に猶予をもたせた他、利用生徒の増加に伴い、自分に都合のいい解釈をする生徒も増えたため、利用条件を明確にし、利用生徒・保護者への理解を促した。

○校内別室の環境整備

利用生徒数や教室利用のニーズに合わせて、パーティションでの個別空間の構築や室内レイアウトの変更を行った。また、照明・空調・生徒機の配置など、生徒が前向きに学習に取り組めるように環境整備を行った。



○活動日記の活用と教員間の連携

家庭環境に不安を抱えている生徒については、生徒の活動日記や校内別室支援員からの報告を踏まえ、担任・養護教諭・生活指導主任・学年主任との情報共有を行った。迅速な教員間の連携により、SCや養護教諭、担任と速やかにつながる機会が増えた。

○目標設定とクラス活動の関わり

登校することが目標になってしまい、登校後の活動に目標が見いだせない生徒もいた。1か月ごとに担任と相談しながら目標の設定を見直すようにしたことで、行事や総合などを通してのクラスとの関わりや、自主学習の課題を設定することができた。

成果

昨年度の課題として、特定の利用生徒の言動が、他の生徒に影響を与えてしまうことが多かった。利用条件の再設定と教員・校内別室支援員間での共有を徹底し、利用生徒がより安心して過ごせる環境づくりを推進することで、利用生徒の不安を解消することができた。

課題

利用生徒が増え、教室内の生徒同士でのトラブルには、教員間で情報共有し、速やかに対応すること。